

30歳からの挑戦—私が助産婦になった理由

山田 美也子

ホームバースなごみ助産院(神奈川県川崎市)

OL 生活 11 年

ちょうど 30 歳になろうとする 12 年前の春、私は看護学校受験のための予備校に願書を出しに行っていた。最終目的は「助産婦」になること。「なんでまた 30 歳になって助産婦に？」と思われるだろうが、それには深い理由があった。

私は製薬会社の研究室に勤務していたが、勤続 11 年にもなるとそこそこ仕事もでき、いっぱしの口も利けるようになる。自分の主張も通そうとする。仕事に打ち込むことは面白かった。そんな私を見兼ねたのだろうか、課長が「君は男と同じように仕事をしようと思っているんじゃないだろうね。女には女の生き方というものがあるんじゃないのかね」と。すかさず私は反論し、「どういう意味ですか。私の生き方に干渉しないで下さいよ!」と食って掛かった。今までの女性の部下は何でも「ハイハイ」ということを聞いていたらしく、反撃に出た私に課長は激怒。その日から、彼の私潰しが始まった。

こんな奴のために、私の人生 台無しにされてたまるかー!

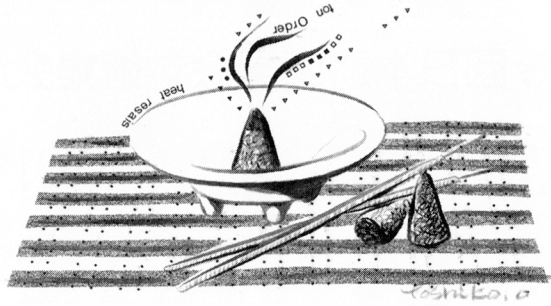
それからというもの、彼は私のやることなすことすべてが気に入らず、私は私でことごとくつかかっていった。「話がある」と課長。「プライベートでお話することはありません。勤務時間中に話してください」と私。職場の雰囲気はギクシャクした。彼は、他の研究員と仲良くしている私が憎らしいらしい。ついに「この研究室から私

が出て行くか、山田さんが出て行くかしかない!」とまで言い出し、それでも彼に屈服しない私。やがて彼は、私に一切仕事を依頼しなくなった。

出社後は新聞を読むだけで、1 日が終わる生活が続いた。見兼ねた同僚が私に「このデータをまとめるのを手伝ってくれない?」と仕事を与えてくれた。張り切ってデータをまとめてレポートを完成させたら、そのレポートがない! さっきまで机の上に置いてあったのに……とごみ箱に目を見ると、そこにはビリビリに破かれたレポートが……。悔やし涙が止まらなかった。「やっぱりこんな奴のために、私の 1 度しかない人生、台無しにされてたまるかー!」と結論を出し、この屈辱をバネに飛躍できるような第 2 の人生設計を始めたのが、29 歳の冬だった。

一生できる職探し

課長の言う「女の幸せ」とかいう結婚をしたくなかったわけではない。ステキな人に巡り会ったら一緒に生活してみたかったし、子供も産み育ててみたかった。でもそれと仕事は別。小さい頃から母はパートだったが仕事をし、零細企業でいつ潰れるかわからない父の職を共稼ぎで支えていた。幼い頃は母が働いているために寂しい思いもしたが、徐々に働く母のほうが生き生きしていて素敵であり、女性が働くのは当然という意識が変わった。だからかもしれない。働く女性の凛々しい姿にあこがれ、きちんとした職につかなければとか、一生働き続けられる職を探そうとか考えたのは。



親友の一人がそんな私の状況を知って「ねえ、助産婦になってみない？」と持ち掛けてきた。「助産婦って昔の産婆さん？今もいるの？」と聞くと、2人目を産科診療所で出産したばかりの彼女は「一人目は大学病院で、すごく辛なお産だった。でも今回は診療所で助産婦さんにずっとついてもらって、とってもいいお産ができたんだよ。あの仕事は女性にしかできない、女性だからこそこの仕事で、一生かけても悔いのない仕事だよ。産む産婦にとってはなくてはならない、頼りになる唯一の存在なんだよ」と力説した。

「でもその資格って、看護婦の免許もいるでしょ？それから助産婦学校に行くと最短でも4年かかるよね」と尻込みしている私に、「何言ってるの！助産婦になったら80歳まで仕事ができるのよ！これからの人生50年のうちの、たった4年よ！アッという間よ！」と檄を飛ばしてくれた。80歳までというのは魅力的だった。なんとなくその気にさせられ(そそのかされ?),「やってみるか」とその春、予備校の門をたたいた。

「ピンからキリまで受験してください」

看護系の予備校に会社が終わったあとの夜間と日曜クラスにだけ通ったが、学業から離れて久しい私は「これではとっっても来年の受験には間に合わない！」と判断。会社を退職、あの課長ともお別れして、みっちり予備校通いを始めたのは夏期講習からだった。同級生は現役高校生と1浪生ばかり。いまだかつてあんなに勉強したことはない！この食いしん坊の私が、眠くなるからと食事

を控え、睡眠時間を削り、予備校と図書館を往復していた。

「ここですまずいたらあの課長に『ほれ見たことか』と笑われる。なんとしても合格せねば！」と必死だった。予備校の先生からは「山田さん。ピンからキリまで受験してくださいね。どこでどう落とされるかわかりませんから。筆記ができて面接がありますからね」と釘をさされた。

サクラサク！

神様はいるものだ！受験した看護学校はもちろん年齢制限がない学校だったが、「若い生徒の刺激になります。是非当校で学んでください」と言ってくれました。年齢で落とされると思っていた私は、嬉しくて涙が出た。やった！やった！東京女子医大看護短大に合格！

こうして私の助産婦への道は開かれた。今ではあの課長に感謝している。私に人生を見つめ直すチャンスを与えてくれたのだから。

あれから12年。もう思い出話になってしまったが、私は今も助産婦業を続け、活き活きと充実した日々を過ごしている。課長にこの場をお借りして一言。「助産婦という“女の幸せ”を掴むことができました。この天職につかせてもらって、心から感謝しております。ありがとう!!」

次号は、私が開業するために研修に行った助産院で、そのときに大変お世話になった富吉由香里さんへバトンタッチします。彫刻家の故岡本太郎氏をこよなく愛する富吉さんです。

(やまだ・みやこ)